ポラリスを仰ぐ北の大地から

地域での交流活動
～音楽を通じて～

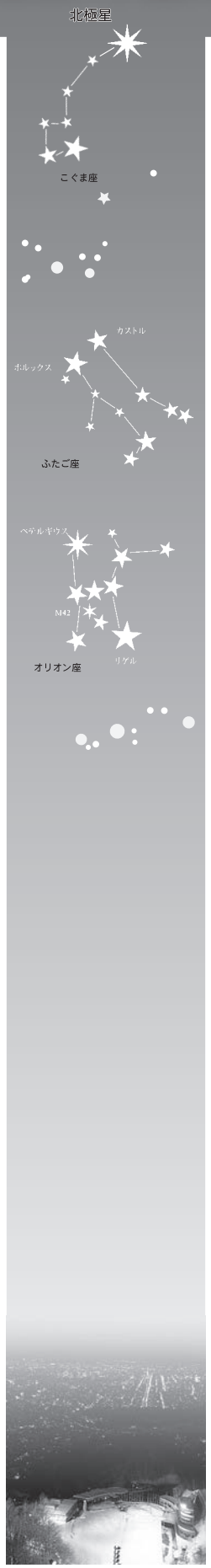
日高医師会 会長　小松　幹志

私がこの地に来てから早くも13年が経ちました。それまでは大学病院での日々の仕事に忙殺され、自分自身や家族のための時間など確保できない生活が続いておりましたが、日高の地で地域医療を行うにあたり時間に少し余裕ができ、心にもゆとりが生まれました。それで学生時代にかじったギターの練習を再び始めました。

それから２、３年たった頃でしょうか。私がギターを弾いていることが町内でも噂になり、ある日、友人である町内の歯科医院の院長から「今日、チューリップの安部さんが来てるんだけど遊びに来ませんか？」と電話がありました。チューリップというと私が中学生の頃「心の旅」が流行っていて、私も友人とバンドを組んでコピーをしていたので知っていましたが、まさか静内に来ているとは思いもよらず半信半疑のまま院長宅を訪問すると、本当に本物の安部俊幸さんがそこにおりました。あこがれのミュージシャンとのひとときは、あっという間でしたが、一緒に演奏したり歌ったりして楽しい時間を過ごすことができました。その後彼がたびたび静内を訪問することがあり、また、姫野達也さんや他のメンバーも時折静内に遊びに来ていただいております。

2014年７月７日に安部さんが脳出血で亡くなった時は大変ショックでしたが、翌年、追悼の意味も込め野外ライブ（名称Dr. Kロックフェスティバル）を企画したところ町内の音楽愛好家が集まり、また姫野さんにもご参加をいただき大成功のイベントとなりました。そのときの仲間や町外からの参加もあり今年まで５回を数えるほどになりました。年々観客も増えてきてさまざまな年代、さまざまな職種の方々に足を運んでいただき交流の輪が広がってきております。

このように医療だけではなく、積極的に外に出て地域住民の方々と交流を深めていくことが、地域の活性化につながると考えております。10年後には町の一大イベントとして位置づけられることを祈りつつ日々練習に励んでおります。



医師の働き方改革は？

三笠市医師会 会長　川﨑　君王

残業時間数が議論されてきた。厚労省は医療改革を地域医療構想、医師・医療従事者の働き方改革、医師偏在対策を三位一体としている。そもそも三位一体とはキリスト教における唯一神を父と子と聖霊とするもので不可分のものである。根本は唯一で表出される時は三つの表現型を取る状況とも言える。医療改革が根本で、表出に医師の働き方改革がある。と解釈することは難くない。何でも改革が叫ばれた平成30年間が過ぎ去り、医療改革は財政から発想されていることは明らかで、なぜお金か？バブルの破綻処理が迅速にできず、金融機関は健全化したことにはなっているが、経済が思う程成長せず個人所得の伸びを実感できていない。医療を含む社会保障費は少子高齢化に伴い増大しているが、拡大する医療の費用を個人に求められず、費用の抑制が迫られた。医療を再構築して生産性を向上させると少ない予算でより多くのサービス提供が可能になっていくだろう。

バートランド・ラッセルは未来を不確実なものであると捉えて、ある農場の話では鶏は自分を大事にして餌を毎日与えてくれる農夫を善良な人間と思っていた。その農場のほかの動物から農夫は善良ですか？と言われていた。農夫は鶏を肥らせて、その首を捻って出荷した。平穏な現在が未来も続くと安易に思ってはいけない。医療は提供者（医師等）、受益者（患者）、保険者（厚労省も含まれる）で構成されるが、保険者等を通した財政支出を含めた資金なくして運営できず行政に引っ張られ改革されるのであろう。厚労省には医療改革を目に見えることを取り上げるだけでなく、改革の方針を開示しどのような医療を創造するかを明らかにして、議論を深めて未来の社会保障を考えてもらいたいものである。